

西田谷洋著 『村上春樹のフィクション』

中村 三 春

本書は主として短編作品を対象として、村上春樹の多くのテクストを理論的に論じたものである。小説だけでなく、エッセー・評論・紀行・翻訳などをも区別せずに取り上げ、村上関連作品として山川直人・新海誠の映画やアニメーション映画をも対象に含めている。また特に、国語の教材となった村上作品にも注力し、それらを認知言語学・認知意味論・関連性理論や言語哲学を基礎として発展させた認知物語論の方法を基幹として、言語表現の分析とイデオロギー批判を核心とする論述が展開される。全二十六章は、「Ⅰ 修辭的構成」「Ⅱ 幻想の物語」、「Ⅲ 視覚性と物語」、「Ⅳ 倫理とイデオロギー」の四部に区分され、各章の題目も、たとえば「修辭と構成」、「語り手と視点」、「距離とエコー」、「虚構のモラリティー」などのように、理念的事項が主題に掲げられ、作品名が副題に入るように作られており、総じて理論中心の装いを凝らした論述構成となっている。

いずれも注目すべき論考だが、村上国語教材の定番とも言うべき「鏡」を論じた章、コンストラクション（構成体）に

ついて「蛭」や超短編に即して取り上げた章、語り手・視点・距離・エコーなどのナラトロジーや話法の観点について「タイランド」「レキシントンの幽霊」「ベースデイ・ガール」に触れて論じた章、表象不可能性・動物性・責任・公正などの思想・イデオロギーに関して『本当の戦争の話をしよう』『恋するザムザ』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』を対象に追究した章などが、特に印象に残った。先端的な研究書がいつもそうであるように、本書も、読者に対して極めて挑戦的であると同時に、また困惑を誘うものでもある。論述の性質が常にあるように、その所以となる様式は本書の特長であるとともに、本書の問題点でもある。試みにⅠの「4 残存のコンストラクション——『蛭』」を例に採ると、ここではラネカーの言葉を引用し、「本章は、そうしたコンストラクションのフラクタル性を利用し、『蛭』解釈の更新を行いたい」と目標が定められる。コンストラクションのフラクタル性は、認知主体の物語構築が、低次から高次の水準に至っても再帰的に反復されることを示す。すな

わち細部の要素が繰り返し自己言及的に適用されて、全体を構成することである。同様に次の「5 コンストラクションの問題——超短編Ⅱ『青が消える』とんがり焼の盛衰』『カングルー日和』」でも、コンストラクションを細部と全体との関係を説明する操作概念と定義している。4章の章題にある「残存」は、デイデューベルマンの用語の展開であり、「蛍」の「僕」において死が残存し、死とともにある生として認識されるということである。そこには、不可避なものを回避しようとするパラドックスが生じる。それに引き続き、「残存」のサブスキーマとしての「越境」「容器」のスキーマが論じられ、さらにアイデンティティの危機や対話のレトリック、責任と倫理の問題へと論述は展開されてゆく。

この論旨が、認知言語学のプロトタイプ理論によるICM (Idealized Cognitive Model、理想認知モデル)の三つの図(「残存」「越境」「容器」とともに説明され、「蛍」のように非常にナイーブな用語が、堅固な論理によって分析される。プロトタイプ(prototype)とは最もよい典型例のことであり、ICMは認知プロセスをプロトタイプのモデル化したものである。従って、コンストラクションのフラクタル性に対して着目することは、ICMを用い、その再帰的適用としてテキストの解明を進めることと同義となり、そこにおいて論述の方法は一貫している。この方法は、ICMを構築しておけば、それをモジュールとして繰り返し適用し、変形をも加味して再利用できるので、たとえば「蛍」以外の村上

作品や、村上以外の作品に対しても有効となる。少なくとも、「残存」「越境」「容器」については一定の汎用性を担保できるはずである。本書の各章が、理念的事項を名目として配列されている理由、またはその効果はそこにある。すなわち、本書は村上春樹の理論的研究書でありながら、理論そのものについての研究書でもある。だからこそ本書は、ひとり村上文学のみならず、広く理論的な文芸研究に心を寄せる読者にとって歓迎すべきテキストなのである。

しかし、酷なことを言えば、「蛍」から作られたICMが果たして正しいか否かは、「蛍」のみに依拠しては分からない。認知言語学において多数の用例からプロトタイプが想定されるように、「残存」にしても「越境」「容器」にしても、多数のサンプルなしにはそのICMやスキーマの正しさは容易に判定できない。本書の各章における論述の構成は、この1の4章に典型的に見られるように、初めの節で大きなフレームとなる理論を提示し、しかる後にそれを適用したり敷衍したりする。本当は、この理論提示そのものにそれ相応の論証を当てるべきではないだろうか。「蛍」に適用するICMを抽出するためには、「蛍」のみならず、あるいは村上作品のみならず、多数の用例に基づいた分析と総合が必要なのではないか。それなしには、そのフラクタル的な適用によって再現されるコンストラクションも、いわば「蛍」の理論で「蛍」を説明するものに過ぎなくなり、汎用性を持たない孤立した営為に留まらざるを得なくなる。

さらに、本章の後半では、「蜚」の観察者＝語り手の「僕」が彼女の恋の含意を潜在させて狂気の側に回収し、「でもそれ以外にどうすればよかったのだろうか？」として責任回避の自己正当化を図ったとする解釈が示される。むしろ「残存」よりはこの辺についてのICMが書かれれば読者としては幸甚なのだが、この解釈は通常の論述によっている。ということは、別の解釈を以てする通常の反証は常に可能なのである。理論が再利用されなければ、あるいは解釈のICMが置かれなければ、それらの理論は断片化し、いわば、理論的論述におけるフラクタルなコンストラクションは成立しない。その結果として、理論に関する論述は部分相互の連絡が希薄な、断片の並列されたモンタージュ的なテキストとなる。

もう一つ例を挙げれば、IIの「I 語り手と視点——『タイルランド』」では、ナラトロジーと文体論が理論的なフレームとして、前半の節で展開される。オニール、バルの意識の志向性のモデルから、参照点に対して視線を移動するスキヤニングの理論を定義する、いわば認知語り論を基礎とし、視点や自由間接話法などの文芸テキストにおける発現について構築される理論は、やはり汎用性があつて価値が高い。しかし、「タイルランド」の核心部分の解釈において、これらの参照点移動や自由間接話法の分析の結果、語り手は「老女とニミットの主張を肯定しているのである」と論じられている。また、これらの物語総体は、文明から野性へと女性を排除する女性嫌悪的でオリエンタリズム的な物語とも見なされる。

さて、果たして、小説における語りや文体は、主張や肯定と直結するのだろうか。仮にそうであるとしても、それは自明のことではないのだから、それを説明する理論が必要である。その理論がなければ、やはりナラトロジーと文体論、さらにジェンダー批評やオリエンタリズムも各々孤立し、一種の理論のパッチワークとなるほかにない。文脈的な連絡が希薄であり、また次々と参照される理論書の数が膨大であるために、本書の総体は作品を題材とした理論事典もしくは理論マニュアルであるかのように見え、冒頭から線状的に通読しやすいものではなく、事典やマニュアルを引くように適宜、参照するにふさわしいものとなる。逆に通例の研究書のように、〈村上春樹のテキスト〉という焦点を求める読者は、そのような一貫した焦点は結ばないために困惑することだろう。これが本書のもう一つの相貌である。

ところが、本書の根底にある姿勢は、必ずしもフラグメンタルな論述に傾斜するものではない。「6 物語とコンストラクション」では、関連性理論に基づき、物語は語りにおいて「有意味性を最適化するよう構造化されている」と、また認知言語学に基づき、「個々の要素の総和以上の意味が全体にある」と、コンストラクションを説明している。根元的には、何が最適化された意味なのか、また個々の要素の総和と全体の意味とをどのようにして比べるのか、定量分析のできない意味の水準においては言うことはできない。これは関連性理論や全体論的な解釈学一般に内在する問題であると考へ

られるが、しかしこのような一種の意味論的全体論は、本書における村上のテクストの意味の把握においては一貫し、それはいわば本書の政治的態度において顕著に認められる。

例を挙げれば、IVの「3 夢のエージェンシー——踊る小人」において、小人の予言成就を読み取り、「我々は大きな物語に操作される」と、「背後の大きなメカニズム」の存在を強調し、続く「4 システムと責任——『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』」では、どこにもシステムから中立な世界はないとする前提から、「自分が作った場所に留まる点では、街で生きることも森で生きることも同じである」と結論づけている。また、全体論的なシステムとの関係において物語をとらえる見方は、えてして寓意的な読解に近づく。Iの「3 亡霊の偏在性と局所性——『鏡』」では、「僕」は体制と反体制の両者から距離を取る単独の反体制主体と見なされ、IIの「プレカリアート・マネーゲーム——『ニューヨーク炭鉱の悲劇』」は、この小説をネオリベリズムの形成過程のアレゴリーとしてとらえ、最終的には「不安定な生をいかにきりぬげるかを描く物語」として読み解く。これらは、寓意を固定的な意味を散乱させる方向ではなく、物語を別の物語に置き換える教訓的な寓話として機能させている。これらにおいては、細部への意志よりもむしろシステムとの関わりにおける表出的全体性（要素が全体を表象すること）が勝っているように見える。

要約すると、本書は理論的前衛を走りつつ、その理論を統

括合せずに縦覧する性質が強い反面、全体化・構造化に対する理論的またイデオロギー的な志向も顕著に認められるということである。従って言い方を換えるならば、本書は複数の水準に互って多面的なテクストなのだ。それを不統一とかまとまりが悪いと批評することもできなくはないが、繰り返すならば、これらは本書の問題点であると同時に特長でもある。多面性の帰結として、IVのセクシオンを中心に、本書は先に挙げたジェンダーや世界システムに関して、村上の基本的な態度に対する批判も認められることは確かであるが、全体としては、これこそが（村上春樹のテクスト）の精髓だというような概括や統合を決して行わない。むしろ、あえて理論的断片の集積という趣向を装い、安易な統合を積極的に回避する姿勢を見せている。その結果として、表象不可能性、プレカリアート、女語り、動物性、現勢化と潜勢化、システム、責任と公正、そしてフィクションなど多くの概念がそれ自体として解釈され、次々に村上のテクストと関連づけられる。もしかしたら、これこそが本書の提起する最も新しい理論のあり方かも知れない。すなわちそれは、固定的で硬直したフレームの陥穽に落ち込んだ理論の時代を越え、個々のテクストへの適用にとことん拘泥する（理論以後の理論）の時代にふさわしい理論追究の道筋なのである。

（二〇一七年一月五日 ひつじ書房 五〇八頁 五二〇〇円＋税）

（なかむら・みはる 北海道大学大学院教授）